ッパ文化史全体への目配り。そして第三に、日本では珍しいローマ・カトリック的な視野、というところでしょうか。たとえば、キリスト教的主題を伏在させる絵画を資料にすることになっても、あまり見当外れな分析はしないだろうということです。

*Giovanni Antonio Canal, called Canaletto (Italian (Venice),1697-1768), *View of the Riva degli Schiavoni, Venice*, late 1730s, oil on canvas, 18 1/2 × 24 7/8 in. (47.1 × 63.3cm.). Toledo Museum of Art (Toledo, Ohio), Purchased with funds from the Libbey Endowment, Gift of Edward Drummond Libbey, 1951.404 Photo Credit: Image Source, Toledo.

**Joseph Mallord William Turner, 1775-1851, *Venice, the Bridge of Sighs*, exhibited 1840, oil on canvas, 686 × 914 mm. Accepted by the nation as part of the Turner Bequest 1856. Digital Image Credit: Tate, London.

ESSAY 研究エッセイ

鹿児島県に残る「琉球」—僧侶の墓を中心に—

渡辺　美季（非文字資料研究センター　研究員）

1．加世田の琉球漆器

2005年11月25日、私は何名かの研究者と鹿児島県南さつま市にある加世田（かせだ）郷土資料館を見学していた。加世田とゆかりの深い戦国大名・島津忠良（日新公、1497～1568年）の遺品を展示するコーナーにさしかかった時、横にいた琉球史研究者の上里隆史氏が「日新公の御鉢子」とされる漆器を指して「これ古琉球（こりゅうきゅう）の漆器じゃないですか？」と言った。古琉球とは、琉球王国の前半期——王国が形成され始める12世紀頃から、1609年の島津氏の琉球侵攻によって琉球が日本の支配下に入るまで——の時期を指す。後半期である近世琉球——1609年から1879年の琉球処分によって王国が終焉を迎えるまで——の漆器であるならまだしも、それ以前のものが、しかも琉球の漆器と気づかれずに残っているなんて、そんなことがあるのだろうかと半信半疑だったが、果たして後日専門家による本格的な調査が行われ、古琉球後期の琉球漆器の入子碗であることが確認された（安里進「仙台と薩摩に伝世した琉球漆器の祭具」『漆工史』29、2006）。私は鹿児島に残る琉球の貴重な遺物の「発見」現場に立ち会ってしまったことになる。

鹿児島（薩摩）は古来より地理・経済・政治的に琉球王国と関わりの深い地域であり、今も様々な琉球の「痕跡」が残っている。その中にはすでによく知られているものもあるが、一方で先の漆器のように全く琉球のものと気づかれずに「残っている」ものもある。それらは琉球人の活動や、琉球と鹿児島の交流に関する極めてリアルで貴重な情報を発信してくれる資料（史料）である。近世琉球の国際関係史を主に研究する私は、2005年頃——つまり漆器「発見」事件の前後——から薩琉交流の諸相に関心を持つようになり、毎年他の研究者と協力し

図1　参考地図

写真１　年行寺跡の琉球僧墓

写真２　明山寺跡の観音像

ながら鹿児島各地に残る琉球の「痕跡」の調査を行ってきた。まだまだ全容はつかめておらず、調査が進めば進むほど分からないことが増えていくという状況だが、この場を借りてその成果の一端として琉球僧の墓を幾つか紹介してみたい。

２．永野の琉球人墓

琉球と薩摩の交流は海路を通じて行われたため、琉球の「痕跡」は沿海部に多い。しかし数は少ないものの、内陸にも重要な「痕跡」が見出せることがある。その一つが、川内川上流の山間部に位置するさつま町永野の琉球僧墓である。ここにはかつて年（念）行寺という臨済宗の寺院があった。記録によれば琉球人の玄超禅師が中興し、それ以後、琉球僧が五代も続けて住持となったという（『三国名勝図会』巻 42）。現在はその墓地だけが残るが――鹿児島では廃仏毀釈により寺院の大半が破壊された――、そこに三基の琉球僧の墓が残っている（写真 1）。以下は、薩摩町郷土誌編さん委員会編『薩摩町郷土誌』（薩摩町、1998）の記事に肉眼観察の成果を反映した墓碑の文面である。

①（左端）：［正面］琉球国伍徳□勝林徒／［背面・右］享保十四（1729）己酉九月二十一日□／［背面・左］□□□□□□□和尚之塔

②（中央）：［正面］琉球僧仙江院徒也／［背面・右］宝暦六（1756）年丙子九月二十九日／［背面・左］前住當院妙心第一座九知牛和尚立焉自弟子中

③（右端）：［正面］琉球僧□岸軒徒／［背面・右］寛保三（1743）癸亥四月十九天／［背面・左］前住雪峯知電俊板□塔

また近くの泉福寺（浄土真宗本願寺派、1872 年創建）には、年行寺の遺物として「釈迦涅槃図」が伝わっている。年に一度しか一般公開されないため未だ実見できていないが、その裏には 1760（宝暦 10）年の補修について施主 10 名および表具師の名前が記されており、施主の筆頭は「琉僧智璨（燦カ？）」で智璨は「当仮住」であったという（『薩摩町郷土誌』）。さらに、さつま町広瀬の南方神社には「金山安養院琉球僧」云々と記された年行寺の棟札が保存されているそうだが（『薩摩町郷土誌』）、これも実見に至っていない。

３．大隅半島の琉球人墓

ところでなぜこの寺に琉球僧がいたのだろうか。その鍵となるのは、遙か離れた大隅半島の東側にある志布志の名刹・大慈寺（臨済宗）である。近世の琉球僧侶はしばしば薩摩藩領へ参禅したが[1]、大慈寺は琉球から参禅する臨済僧の拠点となった寺院であった（藤田励夫「大慈寺と対外交流」『京都妙心寺―禅の至宝と九州・琉球―』西日本新聞社、2010）。そして永野の年行寺は、この大慈寺の末寺・広徳寺（曽木）の末寺であったのである。年行寺に琉球僧がやってきたのは、多分に大慈寺のネットワークによるものであったのだろう。但し年行寺の琉球僧の素性や、現地における彼らの生活の様子、五代連続で琉球僧が住持となった理由などについては、関連史料がなく皆目分からない。

1 古琉球期には日本各地へ参禅したが、近世前半に段階的に薩摩領内から出ることが禁止され、1731年に滞在期間の上限が 15年と定められた（深澤秋人「遍参僧に関する覚書」『史料編集室紀要』23、2008）。
2 大慈寺の什器目録（1953 年 7 月）には「即心院龍翔寺琉球末派等古文書数通」とある。

なお大隅半島には大慈寺に二基、その末寺の道隆寺跡（高山）に一基の琉球僧墓が残されている（小野まさ子「資料紹介」『地域と文化』57、1990、同「道隆寺にある琉球僧の墓」『浦添市立図書館紀要』3、1991）。また高山からほど近い東串良町唐仁の明山寺跡には、琉球僧・越山なる人物が建立した観音像が残っている（写真2）。台座の部分に「正月十八日／琉球国／越山建立／正五九月式日／文化十五（1818）年戊寅／町中安全／正観音／村裡吉祥」とある。明山寺は曹洞宗で高山瑞光院の末寺であった。

4．国分の琉球人墓

一方、鹿児島湾に面した霧島市国分湊の中福良には琉球人の住持墓（写真3）が残る。墓碑には「文化八（1811）年三月十五日／富寺前住大慈端堂恵發西［癸要カ？］堂和尚／琉球國中山府那覇邑／龍翔院我翁従」とある。龍翔院とはここにかつてあった寺院である。その詳細は不明だが、大慈寺の末寺である可能性がある[2]。

同じく国分広瀬の小村には、国分宮内の正興寺（建仁寺の末）の末寺であった日輪山東光院（臨済宗）の琉球僧墓三基（写真4･5）がある。墓碑は以下の通りである。

①琉球僧墓／得海祖盛智蔵禅師／元禄八（1695）乙亥十月初二日

②前正興当院開山星淑大和尚／琉球禅隆建立之／元禄九（1696）丙子天拾月吉日

③琉球僧墓／前正興当院十二世全岑／享保十一（1726）丙午年十一月廿七日

僧侶らの素性は不明だが、東光院は、この地の船頭・堀切彦兵衛が琉球侵攻の船頭を命ぜられた際に海上安全と島津軍の勝利を祈って願を掛け、成就したために再興されたといわれており（『国分諸古記』）、琉球と関わりの深い寺院であったようである。

一方、18世紀末に国分を訪れた医師・橘南谿によれば宮内―東光院の本寺の所在地―には明王寺という山寺があり「住持の僧は琉球国の人」だったという（『西遊記』補遺）。明王寺は不詳だが、国分における琉球僧の様子が僅かなりとも確認できる貴重な事例である。

近世期には琉球･薩摩の双方において国をまたぐ移住･通婚が厳しく制限され、両地域の交流は一時滞在者の往来に限定されていた（渡辺美季「境界を越える人々―近世琉薩交流の一側面―」井上徹編『海域交流と政治権力の対応』汲古書院、2011）。こうした状況の中で、薩摩に参禅した琉球僧は十数年にわたる長期滞在を認められた稀有な存在であった。彼らはどのように現地社会と関わっていたのだろうか。また琉球との関係はどのように維持されていたのだろうか。まだまだ様々な課題が残されている。私の鹿児島通いは当分続くことになるだろう。

※なおここに紹介した史跡を含め、調査の成果の多くは下記のサイトで公開している。

日本における琉球史跡　http://www.geocities.jp/ryukyu_history/Japan_Ryukyu/Main.html

［付記］鹿児島調査の際には毎回多くの方のご支援をいただくが、本稿に関してはとりわけ次の方々に多大なご協力とご教示をたまわった。特に記して深謝申し上げたい。

石田恵一氏・上原兼善氏・重久淳一氏・黒木國泰氏・橋口亘氏

写真3　龍翔院跡の琉球僧墓

写真4　東光院跡の琉球僧墓①

写真5　東光院跡の琉球僧墓②（左から2つ目）、③（右から2つ目）